

六祖大師の中心思想

勝 峰 修

(一)

禪とは佛心である。佛心とは宇宙の妙體にして、有と無を離れ、是と非を絶し、迷悟凡聖を超脱するものであるから、文字を以て現す事は不可能である。又知識を以て思辨することも不可能である。此の如き眞理は經典中には存在せず、釋尊以來今もなほ不斷に活躍して一切物中に存在するものであるから、自己自ら實際にその眞理に觸れその味識、換言すれば眞理の概念を作るのではなく、眞理そのものに一致すべきである。故に禪は文字言語の世界を出でたる眞の體験の世界に入りて始めて知り得らる。即ち主客一體物我不二の境を超えて主客未分前換言すれば第一者の境、天上天下唯我獨尊の境界の體得である。

「宇宙無双日、乾坤唯一人」の境の體験、これを又法身の體得とも云ふ。此處に到り始めて、生死なく修證なき純一絶對者の體得である。これを意識的に云へば、意識の發源たる意識體系の中心意識の體得であり、宗教哲學の藝術の母胎を成すものである。又超認識の境地であるから、知識を以て計ることは不可能である。實參實證以て體達し得るのみである。其の思想たるや概念的ではなく必ず其の根底を大悟の自證内に有するが故に、その大悟の自證内に有するが故に、そは大悟の表示、又は教化の垂語である。然し今は思想として考察することとする。

(二)

慧能の思想は明かに法寶壇經によつて、看取することを得。行由第一に曰く、

便至黃梅禮拜五祖、祖問曰、汝何方人、欲求何物。慧能對曰、弟子是嶺南新州百姓、遠來禮師、惟求作佛、不求餘物。祖言、汝是嶺南人、又是獼獠、若爲堪作佛

慧能曰、人雖有南北、佛性本無南北、獼獠身與和尚不同、佛性有何差別。五祖更欲與語、且見徒衆總在左右乃令隨衆作務。慧能曰啓和尚、弟子自心常住智慧不離自性、即是福田、未審、和尚教作何務。祖云、這獼獠根性大利、汝更勿言、看槽廠去、慧能退至後院。有一行者、差慧能、破柴踏碓、經八月餘。祖一日、忽見慧能、曰吾思汝之見可用、恐有惡人害汝、遂不與汝言、汝知之否。慧能曰、弟子亦知師意、不敢行至堂前令人不覺。

これ人々本具個々圓成の佛性を現せば、そのまま成佛であり、人には差別あれども、佛性は無差別であつて、何人も作佛する事が出来ると云ふことを明にせんとしたのである。此の如く相見の當初に卒直に、自己の見解を表示してゐるのである。而して五祖は彼が大乗の法器なるを見辨して「根性大判」と稱讚してゐる。「弟子自心常

住智慧不離自性即是福田」と云へるは最も六祖の宗旨を明にした處である。天桂の海水一滴に是れを註釋して曰く。

自心者、一切衆生、本覺眞性、亦名自性。常性智慧者非假修而生、非期證而得、亦然不生、靈鑑明徹。故視聽能妙、而通寒暖、不慮而知直、是眞如正覺、自爾常識、大智光明、遍照法界、自心有者也。

一は自性觀の根幹、他は般若觀の根源である。これを見ても、不知文字の一樵夫としては言明し難き語であり、彼の識見の相當卓越してゐたることを知るのである。勿論二概念の根底には自性の一概念が存してゐるのである。次に六祖得法の偈に就て、神秀と比較考察することゝする。神秀曰く。

身是菩提樹。心如明鏡臺。
時々勤拂拭。勿使惹塵埃。

此の偈を呈して許可せられざりしは、未だ對境を認めて主客の兩頭を截斷せざりしに由るのである。慧能曰く
菩提本無樹。明鏡亦非臺。

本來無一物。何處惹塵埃。

禪に於ける無一物の本據は即ちこれである。無一物とは何等把握するものなき單なる空の如く、誤解せらるゝかも知れないが、實は然らずして、恰も秋の碧空の如き一點の雲もなく、見渡す限り晴れやかに、何れを見ても涯しなき天空海濶とした心境の意味である。この心境こそ眞俗二諦はもとよりのこと、聖諦といふ如き思想の流れも截斷して、胸中何等の蟠もなく、眞に清澄そのものであつて、初めて順逆縱橫與奪自在と、何等の障もない自由な作用そのものである。それは佛もなければ、法もなく、迷もなければ、悟もなく、一切を超越した解脱境である。達摩大師の「廓然無聖」と云はれたのもこゝに存する。詳言すれば、無一物とは實に破鏡の照す禪智の光明そのものである。眞に無一物なるものであつてこそ、圓轉活達、往々として可ならざるはなく、自由に其れ自身を表現することが出来るのである。「山花開似錦、澗水湛如藍」(續大藏經正法眼 藏卷第一ノ下)とは無一物中に見られたる無盡藏なる自己の姿でなからうか。換言すれば、一切を脱

した眞に自由な立場に於ける自己相である。

神秀の偈は道を修むる方法を述べ、慧能の偈は菩提を打破し、明鏡を否定して、その徹悟底を述べてゐるか、彼が六祖となりたるは當然のことである。神秀は漸進的修行法を説き、煩惱を次第に拂拭して、以て菩薩道に入るべきを説いたので、「二問不知」と自ら標榜したのである。慧能は、一朝直入的に何等の手段方法を用ひずして、如來地に透徹すべきを教へてゐる。これもとより各自の性格によるは勿論なるも、其の開悟の因縁が、一方は金剛經の「應無所住而生其心」の言葉によりて頓悟し、頓悟禪となり、他方は前述の偈の示すが如く、漸次的佛拭的に悟入する漸修禪となつたのである。こゝに於て兩者の識見の相違を見出し得るのである。

廓然無聖の如き境地を、遊戲三昧とも稱する。かゝる三昧の境地を獲得するの第一要件として、見性即ち自己本來の靈的心性の活動の妙機を徹見する。換言せば、一切の執着を離脱し、矛盾を越え、普遍妥當的な大我の作用に觸れるのである。故に禪を得んとする者は、何人も

先づ此の見性の關門を通過せずして禪を得んとすることは、絶對に不可能である。禪に於ける見性は、斯の如き重要な地位を占めてゐるのである。

然らば何故に見性が重要なや、そは言ふ迄もなく、絶對知の獲得である。即ち相對知や、經驗知は、成程平常の平穩無事の場合には、何等の差障りもなく、順調に運ばれて行くものであるが、一朝自己の經驗以外の事に遭遇すると、往々にしてその方途を失ひ、何等の用をもなさなくなるものである。それで禪は經驗と比較とを、主要な構成要素としてゐる所の相對知と離れた一つの立場を建設して、其の立場からして必要な場合々々に應じて、相對知や經驗知を應用し、以て事に對應せんとするのである。こゝに於て相對知以外の立場を建設する爲に見性の必要が生じ、それによつて絶對知の獲得へと進むのである。斯の如く見性は禪の生命であり、禪は宗教の極致である。而してその生命の極致とは、大悟の内容に屬し、言説の相を以て表現する事は不可能である。唯自己自らの内的生活に突入りて、活躍せる妙機の全體を直

覺する以外に道はないのである。故に慧能は法林寺に於て、自性の清淨性の中心たることを示して、見性成佛することを勸めてゐる。行由第一には「善知識菩提自性本來清淨也」とあり、これが取りも直さず增經に於ける彼の思想の根幹である。天桂はこれに註釋を施して、左の如く説明してゐる。

夫菩提自性、本然清淨、虛靈空妙、而離名相、絕理知故、道極稱曰菩提。乃是自心異號、故經云、欲知菩提當了自心、若了自心、即了菩提、心與菩提、眞實之相畢竟推求不可得。同虛空故、菩提無所證相、無能證相菩提畢竟無諸相故乃至、一切智智及菩提、從心而生、心之實相、本清淨故。

その所謂清淨とは染淨等の妄念を離脱したる意味で、畢竟絶對境にある自性を、抽象的に詮表したるに過ぎぬのである。般若第二に、

何名摩訶。摩訶是大。心量廣大、猶如虛空。無有邊畔亦無方圓大小、亦非青黃赤白、亦無上下長短、亦無嗔無喜、無是非、無善無惡、無有頭尾。

と云つてゐる。是總ての對立を越へた獨自的な存在性を清淨と名付けたことは云ふ迄もない。尙

善知識、自性能含萬法是大。萬法在諸人性中。若見一切人之惡與善、盡皆不取不捨、亦不染着、心如虛空、名之爲大。

自性は萬法の母であり、一切法を能く生ずることを明示してゐる。不取不捨不染着の故に、一切に對して貪愛憎惡の念なく、心大海そのものである。一切を超越するとは、一切を容るゝの意が明瞭に示されてゐる。

善知識、心量廣大、遍周法界。用卽了々分明。應用便知一切。一切卽一、一卽一切。去來自由、心體無滯、卽是般若。

と述べて、清淨の絶對性の客觀的作用を説いてゐる。去來自由心體無滯」とは、解脱自在の機用を示したものであり、この機用によりて始めて禪的作用は發揮するのである。又此の機用ありてこそ、宗教的救済も發生し、哲學的教理も顯現するのである。救済、教理の背後に眞如の自性ありて、無限の力と深遠な理法が存在するのであ

る。頓漸第八に曰く、

一日師告衆曰、吾有一切、無頭無尾無名無字無背無面諸人還識否。

曩には本來無一物と云ひ、今却つて有一物と云ふ。これ論理的には矛盾を免れざれども、先の無一物は頭尾名字等無一物の意味にして、今は無相の一物を示して、彼が體驗せる佛性又は法性を、直に提げて示したのである。法性又は佛性も絶對的立場より云へば、有相の言葉である。

次に佛とは如何なるものであるか。疑問第三に佛向性中作、莫向身外求、自性迷卽是衆生、自性覺卽是佛。とある、佛とはもとより客觀的存在者の意に非ずして、自性を佛と名付け、自性の有する種々なる状態に依りて多數の佛名が現れるのである。されば多數の佛は、一佛の多面である。

然らば如何にして佛となり、如何にして見性すべきであるか、般若第二に曰く、

善知識、我此法門從一般若、生八萬四千智慧。何以故

爲世人有八萬四千塵勞、若無塵勞智慧常現。不離自性。悟此法者、卽是無念無憶無著不起誑妄、用自眞如性。

以智慧觀照於一切法、不取不捨、卽是見性成佛道。

これによつて見れば見性成佛の道は、無念に於て第八識を、無憶に於て第七識を、無著に於て第六識を、不起誑妄に於て前五識を打破して、一眞實の眞如性を以て一切諸法を觀照し、取捨憎愛の念なき境に至る。これが見性成佛の道であると云ふのである。

要するに無一物の自性は、凡ての相對を離れたる不生不滅の恒久性にして、然もよく萬法を生じ、無量の法を具有するものであり、この清淨の絶對性が外的に顯現する場合種々なる佛名現る。此の故に佛とは自性の有する所の功德の發揚に他ならぬ。而して其の自性を求むるには、外に向つて求むるに非ずして、外的に馳する心を止むれば自性の體現る。これが見性成佛であると述べてゐるのである。

(三)

吾人は茲に於て、大師の思想の中心が那邊にあるかを

検討することとする。それは「直指人心見性成佛」の八字にあると思ふ。前述の如く「菩提自性本來清、但用此心直了成佛」と云ひ、又「思量卽不中用見性之人言下須見。」と行由第一に述べて、見性を以て禪の眼目としておられるのである。印宗の問に答へて行由第一に曰く、
黃檗付囑、如何指授、慧能曰、指授卽無、惟論見性、
不論禪定解脫。

六祖の法門は右の如く、不二の法を明にするのである。不二の法とは、善惡因果等の差別を立て、分別することを止め、直に法の根源に達することを云ふので、見性が卽ち不二の法に達した處である。中宗に對する說法に於ても、宣詔第九に曰く、「道由心悟豈在坐也」と云ふて坐禪の形式にのみ束縛せられて其の心を見ざれば、それは邪道を行するのであると云ひ、偏に見性の一大事を説き、一切善惡の心を去つて、自然に清淨の眞諦に得入せよと勧められてゐる。大師臨終の說法に於ても、付囑第十に「有道者得無心者通」と述べ、大師末期の說法に於ても、付囑第十に左の如く説いてゐる。

汝等諦聽、後代迷人、若識衆生、卽是佛性、若不識衆生、萬劫覓佛難逢。吾今教汝、識自心衆生、見自心性。欲求見佛、但識衆生、只爲衆生迷佛非是、佛迷衆生。自性若悟、衆生是佛、自性若迷、佛是衆生、自性平等、衆生是佛、自性邪險、佛是衆生。

一切衆生に須く見性成佛せよと付囑せられてゐるのを見ても、如何に六祖が見性の二字を、力説せられてゐるかを窺ふに充分である。行由第一に、

祖知悟本性、謂慧能曰、不識本心、學法無益。若識自本心、見自本心、卽名丈夫天人師佛。

と説き自性の徹見こそ成佛する直路であることを示してゐる。般若第二に、

善知識、我於忍和尙處、一聞言下便悟、頓見眞如本性。是以將此教法流行、令學道者、頓悟菩提、各自觀心、自見本性。若自不悟、須覓大善知識。解脫最上乘法者、直示正路、是善知識、有大因緣、所謂化導、令得見性、一切善法、因善知識能發起故。三世諸佛、十二部經、在人性中、本自具有。

と見性を力説してゐる。

斯の如く彼の思想は悉く見性を根本として、展開されてゐるのである。彼は自性を以つて、一切法の中心となし、見性を宗教的にも、哲學的にも、その解決點となせるのである。「若違吾教縱吾在世亦無有益」と付囑せられてゐるのは、大いに味ふべきことである。